

新農業人が次々に育つ安平町で 有機農業で自立していく道を追求

「またたび Farm」と「ハラハチファーム」の歩み

2年前に「オーガニックビレッジ」を宣言した胆振管内安平町には、野菜づくりや畑作、平飼い養鶏などに携わる新規就農者が多い。2017年に6戸の農家で設立した「安平町有機農業推進協議会」のメンバーは現在、10戸に増えた。うち7戸はリーダー格の小路健男さん（北海道有機農協代表理事組合長）が創った研修農場（本誌9月号を参照）を経由して「新農業人」になった人たち。既存農家からの参入や他地域から移転してきた人もおり、それぞれの略歴や経験などを活かし、有機農業で自立していく道を追求している。第6回の新・農業人シリーズでは、15年前に道北の愛別町から移り住んだ「またたび Farm」と、大豆や小麦の自然栽培に挑戦している「ハラハチファーム」の歩みを紹介する。
(ルポライター・滝川 康治)



「またたび Farm」では6棟のハウスでトマトやキュウリを有機栽培

営農を続けるには条件が良くなかった。そこで2010年、子どもたちが通った小学校が閉校になるのを機に、雪が少なく、もう少し暖かい地域で有機農業をやろうと考えた。

有機のリーダーの近所で営農子どもも育ち地域活動にも参画

日本海側の町や洞爺湖周辺、胆振管内、札幌近郊などを訪ね歩き、定住の地を探す。畑はあれど住宅のないところでは仕事がやりにくい……

有機のリーダーの近所で當農
子どもも育ち地域活動にも参画

當農を続けるには条件が良くなかつた。そこで2010年、子どもたちが通つた小学校が閉校になるのを機に、雪が少なく、もう少し暖かい地域で有機農業をやろうと考えた。



北の愛別町から移り住み、大豆やカボチャ、ハウス栽培の野菜を手がける「またたび Farm」の俣野利一郎・葉子さん夫妻(左)と、大豆と小麦の自然栽培に挑戦する「ハラハチファーム」の中村欣さん

田舎暮らしを求め道北の愛別へ就農を経て新天地を模索する… 本誌9月号で紹介した小路健男さん（北海道有機農協代表理事組合長）の農場がある安平町の追分地区。「またたび Farm」を営む俣野利一郎さん（1967年、埼玉県生まれ）と妻の葉子さん（69年、横浜市生まれ）は、今から15年前に道北の愛別町から同地区に移り住んだ。今では、4ヘクタールの農地に大豆やカボチャなどを、6棟のハウスではキュウリを中心栽培する。

鍛金店を営む家庭で育つた俣野利一郎さんは、地元の高校を卒業後北海道大学農学部に進んだ。河川について関心があり、環境関係の勉強がしたかったという。北大では森林関係の勉強をして、大学院でも学ぶ本屋の家庭で育つた葉子さんは北大時代の同期で95年に結婚。院生時代は積丹町の有機農家などでの実習生活も体験する。

ふたりが結婚した年、友人のつてを頼つて愛別に移り住んだ。「安平に比べ雪が多く、耕作期間も短いなど好条件ではなかつたけれども考えなかつた」（利一郎さん）

「わたしは田舎で暮らしたかったし、北海道には憧れがありましたね。外で働くのは苦ではないし、草取りも好きですよ」(葉子さん)

移住の翌年、俣野さん夫妻はまだ幼ない長男・桂さんとともに町内の協和地区に定住し、夏場は農家の手伝いなどのアルバイト生活を送る。さらに98年から99年にかけて農業研修を重ね、2000年には晴れて新規就農者の認定を受けた。

夢を実現した2人は3ヘクタールほどの農地を借り、ジャガイモやスイートコーン、ニンジン、アスパラガス、トマト、インゲンなどを有機栽培し、北海道有機農協などに出荷した。しかし、農地の取得は実現できなしまだつた。

市街地から数キロ離れた協和地区の環境は気に入っていた。

「小さな集落でしたが、近所の人たちから子どもが親切にしてもらつた。仲良くなつた人もいて、今でも行き来していますよ」(利一郎さん)

「わたしは田舎で子育てがしたくて、保育の仕事を30年近く続けてきました。愛別時代に通年で保育の仕事を始めたんです」(葉子さん)

愛別での生活には愛着があつたが、

そんな中、91年に新規就農した小路さんが所有していた物件には住宅が付いていた。セカンドハウス用に購入したものだったという。

「小路さんのところと、うちの子の年齢が近いことも安平への移住を決断する要素になりましたね」

と、利一郎さんが当時を振り返る。こうした経緯をたどって安平に移り住み、新天地での生活を始めてから15年の歳月が流れた。

侯野さん夫妻には現在、12歳から28歳までの3男2女がおり、全員に樹にまつわる名前を付けている。今では、長男の桂さんは夏場のトラクター仕事を手伝ってくれる。農場の仕事は、利一郎さんが大豆やカボチャ、トマトの生産などを担当し、葉子さんはキュウリを専門に手がける。

「僕らはもともと消費者。『有機とうやり方ならば農業をやつてみよう』と思い、この仕事を始めた。今さら、その生き方は変えられません」

（利一郎さん）と力を込める。有機農家6戸12人が集い、「安平町有機農業推進協議会」が17年に誕生し、新規参入者の育成・相談など多様な活動を展開している話は9月号



収穫期を迎えた「ハラハチファーム」の大豆畠。独自の管理方法で育て、草が少ない

活するのは大変でした。ふたりでフルに働き苦労をかけたので、今は妻に楽をさせたいと思いますね」

農地を取得できる機会が増え、現在は町内数カ所に合計約30ヘクタールを所有する。規模拡大にともないここ数年は小麦と大豆、緑肥を10ヘクタールずつ輪作するやり方を柱にした自然栽培を試み、収穫した農産物は有機農協に出荷する。

かつてのトマト栽培はやめ、大豆と小麦以外では「道の駅」向けの露地

そんな中で、10年に札幌市内で開催された同公社主催の「新規就農フェア」の出展ブースで小路さんにお会い、北海道有機農協の存在を初めて知った。「うちに来て（実際の姿を見学しては）との助言を受けて農場を訪れると、自給自足をベースに米や野菜などを作り、中村さんの理想に近い農業を営んでいた。地理的にも実家や札幌に比較的近い。

11年春、10年間のサラリーマン生活にピリオドを打ち、安平で2年間の夫婦での研修生活をスタート。1年目は第二子が誕生したため欣さんのみの研修で、小路さんらとともに

一通りの作物を栽培。2年目には夫婦で20～30アールほどの圃場を管理し、10種類ほどの有機野菜の栽培から収穫、出荷までを学んだ。

大豆と小麦の自然栽培にも挑戦

持続可能な農業に確かに手応え

13年には、小路さんの農場の一部1・3ヘクタールを借り、新規就農が実現した。そして2年後、約4・5ヘクタールの離農跡地を取得し、現在地に移転・独立している。

新規就農から10年間ほどは、多品目の野菜づくりを経て、栽培した中玉トマトのジュース加工も手がける。

「北海道有機農協の理事を務めるかたわら、「オーガニック・クビレッジ」の活動にも携わる葉子さんは、物事を前向きに捉えている。

「有機農業は環境にやさしく、おいしい農産物で持続可能な社会ができる——これから時代を考えると良い農業だと思いますよ。(23年の)宣すれ」(和一郎さん)

その具体的な事業のひとつが「農福連携」の試みだ。俣野さんの農場にも現在、会社勤めになじめない人らがふたり一組で訪れ、作業を手伝ってくれている(平日のみ)。

「札幌のコーディネーターが人材を探し、農場に同行してくれます。とても暑くなるハウスの中で、真面目に働いてもらえるのでありがたいで

地面積に占める有機栽培の割合を50年には25%に拡大する——という、農林水産省の「みどりの農業システム戦略」を踏まえ、いま道内外で「オーガニックビレッジ」の取り組みが進んでいる。安平町は23年に



ハウスに隣接する畑では大豆も栽培する

地域や家族らの協力を得ながら、
侯野さん一家の“環境に負荷をかけ
ない有機農業”的営みが続く。

家庭菜園が高じて新規就農へ
研修農場で実践的に有機を学ぶ

中村欣さん(78年、芽室町生まれ)、
美香さん(76年、札幌市生まれ)夫妻
が営む、町内の安平地区にある「ハ

言後は少量ですが学校給食に有機農産物を使つてもらつてゐるので、今後より進めていけるとい。わたしは、生産農家と有機農業などを応援する消費者がともに実行委員になつてゐる『オーガニックファースタ』にも参加しています。ただ、安平には若い仲間がいっぱいいるけれど、なかなか一般町民に広がらない、といつた課題もありますね」

「産地や添加物も気にせず食べられるのが母乳になることも、よく知らなかつたのです。でも妻の病気をきっかけに、無添加の食品や有機農産物、産直などに対する関心が生まれました」

安心・安全な食べものを求める気持ちは高まり、市民農園を借りるなどして野菜類の栽培を始め、「有機農

業後は2011年までの10年間、北広島市内の印刷会社で電気関係のメンテナンス業務に携わった。

サラリーマン時代に美香さんと結婚し、08年には長女が誕生。農業との関わりは、この頃にさかのぼる。出産後の美香さんは乳栓炎に罹り助産師から「食べ物のを見直すといいですよ」と助言を受けた。

ラハチファーム」。家庭菜園が高じて新規就農の道を志し、今では約30ヘクタールの農地で大豆と小麦を中心とした自然栽培を手がけるようになった。

教員の家庭に育つた欣さんは、地元の高校を卒業し、札幌市内にあつた北海道東海大学に進み、得意のバレーボールに明け暮れた。一時期は選手として、今では



大粒の「ゆきほまれ」(写真)と小粒の「ゆきしづか」の2種類を栽培

りたいことがあるなら応援するよ」と背中を押してくれた。

しかし、当時は有機で研修できる農場は少なく、ある自治体では有機農業のことを話題に出すと拒否反応を示された。北海道農業公社の新規就農担当者にも相談したが、門前払いのような対応だったという。



「道の駅」に常設されている有機農産物や平飼い卵の販売コーナー